

秀賞

自分らしく

宮城県大崎市立古川東中学校

3年 濱野 拳渡

私の人生を振り返ってみると、友達に恵まれているなと感じる。いつも支えられていて、何か恩返しをしなければと思うのだが、何もできずにいた。

私は、緊張すると言葉を発せないことがある。特に、人前で文章を読んだりレポートを発表する時にそれは起こる。

ある日、自分の発表でどもってしまい、授業の時間が押してしまうことがあった。その時に友達から言われた

「目立ちたいの？」

その言葉に私は一瞬、耳を疑った。今までは周りからどもることについては特に指摘されたことがなかったので自分でもそのことについて深く気にすることはなかった。だが、その言葉で周りから自分のどもりがそのように思われているのだなと思った。

それから、私はどもることを恐れ発言することが怖くなっていった。

自分の発表が近づいてくると落ちつかない気持ちになり、発表する間はやはりどもってしまう。立って黙っている自分、ざわざわする周り。この空間に耐えることは私にはできなかった。この生活が続き、私は学校に行くことが憂鬱になった。授業で当てられないことを祈りながら過ごす毎日は苦しかった。

苦しい日々の中、仲の良い友達が「大丈夫？」と話しかけてくれた。私は、緊張するとどもってしまうこと、今の生活が苦痛なことを話した。その友達は親身になって私の話を聞いてくれ、「そんなの誰も気にしてないよ」と、笑い飛ばしてくれた。この一言が私の心を救った。心が軽くなった。今までの自分が悩んでいたことがばかばかしくなった。自分は考え過ぎていたのだな、と悟った。それでも、私は怖いままだった。「授業の時、手を挙げてみなよ」と友達に言われた。「ここで、思いきって手を挙げてみれば、何か変わると思うよ」と友達に言われた。あまり気は進まなかった。正直、前のようにとても怖かった。また何か言われるのでは……と、不安でしかたなかった。でも、自分を励まし応援してくれる友達を信じて精いっぱい力をふりしぼって手を挙げてみた。やはり発表は、どもってしまったが、以前のように周りから何か言われることはなかった。その時、一歩前に踏み込めた自分に、ちょっとではあるが自信を持つことができた。

その後の授業、私は久々に手を挙げた。やはり落ちつかなかった。当たるな

と願った。だが、すぐに当たった。一人で椅子から立った。静寂。この世の時間が止まったような感じがした。少々言葉が詰まってしまったが、最後まで文章を読めた。だが、また私は不安になった。「誰か気にしていないか。」「何か言われるか。」と。結局そのようなことはなかった。休み時間に仲の良い友達が話しかけてきた。

「やったね。できたじゃん。」

その時、友達は自分のことのように喜んでくれた。

そして私は授業の時に毎回感じていた苦しみがなくなっていく。自分から手を挙げることまではしないが、自分が当たったとしても、どもったりしても以前の心配はなくなった。学校も憂鬱ではなくなった。以前に比べれば毎日を気楽に過ごせるようになった。緊張することもある。どもってしまうこともある。でも今は自分の意見を言ったり、文章を読むことが楽しいと思えたりするようになった。

友達の支えのおかげで今の自分がいる。来てほしくなかった朝も今は希望に満ちている。人は一人では生きていけない。誰かの支えがないと生きられないということを学べた経験はとても大きな財産となった。私はこれを人生の支えとしてこれからの未来を生きようと思う。今は中学3年生。ずっと友達と過ごせるわけでもない。その中でも、これから私は人を支える人間になりたいと心から思う。支えがあると目に見える世界が色鮮やかになるということを友達が教えてくれたように、私も誰かの世界に色を足してみたいと思った。大切な仲間と別れてしまっても、新たな出会いを大事にし、支え合い、愛や夢で染まる未来に踏み出そうと思った。今の友達とも別れる時がいずれくる。友達には感謝の気持ちを忘れないようにしたい。そして、「ありがとう」という言葉を伝えていきたい。決して流ちょうな言葉でなくても、自分の精いっぱいの話し方で伝えていきたい。きっと、そうすることが自分の友達への恩返しであるのかもしれないからだ。

私の将来の夢。それは、アナウンサーになることだ。どもってしまう自分がアナウンサーに……。もちろん、不安がないといたらうそになる。でも今は期待のほうが大きい。今までの友達の励ましや支えを胸に自分の未来に挑戦していきたい。自分らしく。